

国土交通省 | 天竜川上流河川事務所

DATE: 令和2年5月21日

お待たせしました/
新刊!
余冊配布今回もやります



語りつぐ天竜川 第65巻

「三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って」(碓田 栄一)
うすだ えいち

1. 余冊を無料で配布します!

本書籍は、図書館などに配布した余冊(約100冊)を無料で配布いたします。

(※郵送による送料のみご負担いただきます)詳細は資料2「配布案内」をご覧ください。

※なお、新型コロナウイルスへの対応として、手渡しでの配布は控えさせていただきます。

※在庫に限りがございます。一人一冊とさせていただきますをご了承ください。

本作の概要

1961(昭和36)年に伊那谷を襲った三六災害(土砂災害と大規模な河川氾濫)。「濁流の子」は、災害当時高校生だった碓田栄一さんが、資料収集、ガリ版の原紙切りから印刷までをほとんど独力で行い発行した、被災者の作文集です。

語りつぐ天竜川第65巻では、碓田氏に「濁流の子」編纂を振り返っていただき、当時の想いを語っていただきました。

2. 資料 資料1 「三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って」(一部抜粋)

資料2 配布案内

資料3 「語りつぐ天竜川シリーズ」既刊一覧

なお、下記当事務所ホームページで、全文を読むことができます。

https://www.cbr.mlit.go.jp/tenjyo/jimusyo/publication/pbl_tell/pbl_tell.html

3. 解 禁 指定なし

4. 配 布 先

伊那記者クラブ、飯田市記者クラブ、駒ヶ根市記者クラブ

5. 問合せ先 国土交通省 中部地方整備局

天竜川上流河川事務所 副所長 おおもり ひでと 大森 秀人

建設専門官 かとう みきひと 加藤 幹人

TEL : 0265-81-6417

FAX : 0265-81-6421



目次

| | | |
|---|-----------------------|----|
| 一 | はじめに | 1 |
| 二 | 三六災害と『濁流の子』 | 2 |
| | 三六災害 | 2 |
| | 『濁流の子』とは | 4 |
| 三 | 三六災害の発生と被災地受験生の支援 | 5 |
| | 三六災害の記憶 | 5 |
| | 高校受験生を励ます活動 | 5 |
| | 「濁流の中の高校受験生」の製作を企画 | 10 |
| | 被災生徒の作文 | 11 |
| 四 | 『濁流の子』の製作 | 13 |
| | 『濁流の子』の製作開始 | 15 |
| | 編集・製本作業 | 16 |
| | 『濁流の子』の完成 | 21 |
| 五 | 『濁流の子』製作のその後 | 24 |
| | 復刻版の製作 | 24 |
| | 『続・濁流の子』の製作 | 27 |
| | 人と暮らした伊那谷遺産プロジェクト | 28 |
| | 語り継ぐ『濁流の子』プロジェクト | 30 |
| 六 | 『濁流の子』の取り組みを振り返って | 34 |
| | 製作当時を振り返って | 34 |
| | 復刻されて多くの人の目に触れるようになって | 35 |
| | 『濁流の子・補遺』の製作 | 35 |
| | 今後の防災活動への想い | 37 |
| 七 | おわりに | 37 |

三六災害の記録

「濁流の子」の編纂を振り返って

碓田 栄一

※抜粋

※本冊子は右開き

二 三六災害と『濁流の子』

三六災害

昭和三十六年（一九六一年）、台風の接近と梅雨前線の停滞による激しい雨が伊那谷を襲い、伊那谷では一週間で年間平均雨量の三割を超える豪雨（飯田観測所…総雨量五七九ミリメートル）六月二十三日～七月一日）を記録しました。

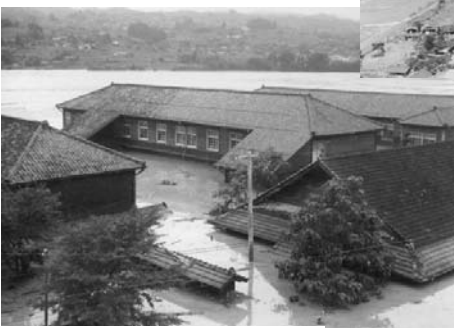
伊那谷の各地で川の氾濫、土石流、地すべりが発生し、何十年に一度か百年に一度くらいにしか起きないといわれる大災害となりました。家や畑が土石流に押し流され、土石流とともに無くなった集落もあります。三六災害による死者・行方不明者は一三六名、家屋の全壊・流失・半壊は千五百戸にも及びました。



決壊寸前の惣兵衛堤防
(高森町)



崩落した大西山付近の様子
(大鹿村)



浸水した川路小・中学校
(飯田市)

一 はじめに

近年、全国各地で大規模な災害が立て続けに発生しています。特に世界的な気候変動の影響とも言われる台風や前線の活発な活動により、局所的な集中豪雨の発生が増えており、それに伴う河川氾濫や土石災害が多発している状況にあります。

天竜川流域においても、脆い地質や急峻な地形の場所が多く、断層も多数存在する地域であることから、過去には三六災害をはじめとした大きな災害が発生しています。国土交通省天竜川上流河川事務所では、河川氾濫や土石災害発生を防止するため、護岸の改修や砂防堰堤等の整備を進めてきました。しかしながら、施設の整備だけでは災害を完全に防止することは難しく、万が一、災害が発生した場合への備えを進めること、流域住民に災害への意識を高めてもらうことは、重要な課題となっています。

そのような背景もあり、地域にて過去に発生した災害時の様子を伝承すること、そこからの教訓を学び、後世に伝えていくことについても、その大切さが再認識されているところです。

当事務所では、平成二十六年度より「語り継ぐ『濁流の子』

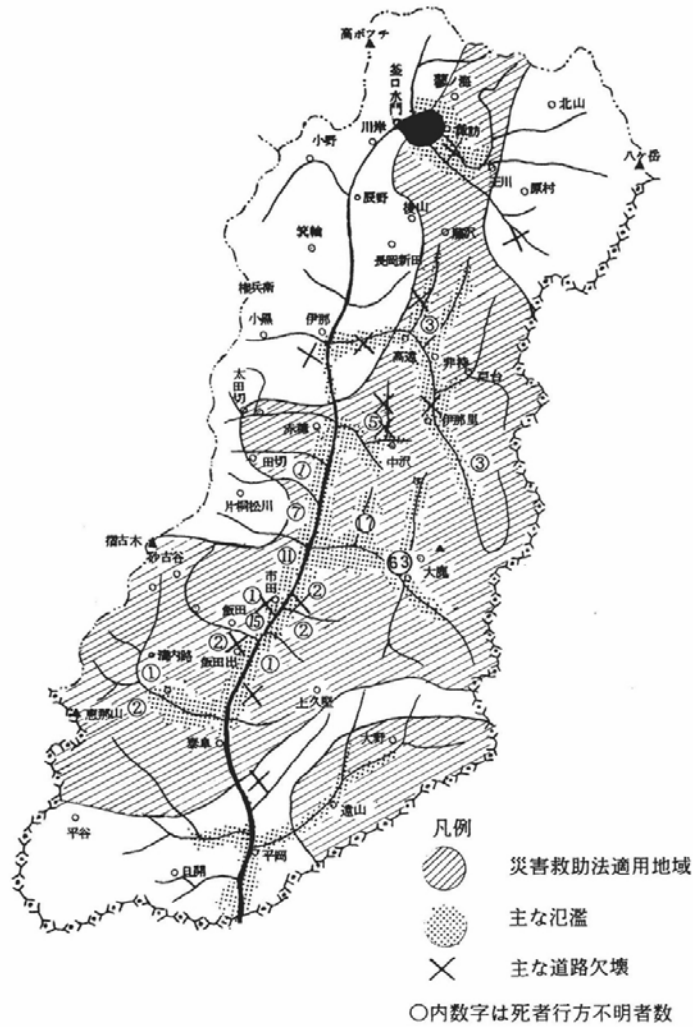
プロジェクト」として、昭和三十六年に伊那谷にて発生した三六災害に関する写真や資料を収集整理し、公開する取り組みを進めてきました。取り組みのタイトルとなっている『濁流の子』は、三六災害発生時やその後の様子などの体験談を当時学生であった碓田栄一氏が独自にまとめた文集です。

本書では、災害発生時、高校生であった碓田さんが「どのようなきっかけ、理由で体験談をまとめることを思い立ったのか」、また「どのような経過で作文の収集、編集、印刷等を行ったのか」「製作・発刊の過程でどのような交流や反響があったのか」などについて、当手を振り返ってお話しいただいた内容をとりまとめました。

今後、災害に対する人々の理解と防災へのさらなる意識向上が求められるなか、本書が防災教育や災害伝承を行っていく際の参考資料となれば幸いです。

天竜川上流河川事務所

天竜川流域被災箇所概要



出典：昭和 36 年度伊那谷大水害の気象
 (国土交通省天竜川上流工事事務所：平成 3 年 3 月発行)

『濁流の子』とは

- 『濁流の子』は、豪雨災害（三六災害）による被災者の作文集である。
- 編纂者は、当時二十歳の大学生だった碓田栄一さん
- 昭和三十九年十二月、災害後三年を経て、災害当時書いた作文や、その後の復興や生活の様子についての体験談などを編纂。
- 災害の記録について、約千編、原稿用紙約三五〇〇枚の作文から編集されたものである。
- 昭和三十九年十二月 ガリ版刷りにて『濁流の子』五百部を独自に発刊
- 平成三年六月 天竜川上流河川事務所が五千部を復刻
- 平成五年四月 天竜川上流河川事務所が『続・濁流の子』を発刊
- 平成三十一年四月 碓田さんが『濁流の子・補遺』を発刊



を依頼してお借りすることができたが、今からすると、当時は、まだ個人情報などは厳しくなかったため、借用が可能だったように思う。できるだけ早く返却するため、まずはとにかく書き写す作業が続いた。当時はコピー機がなかったため、約千点の作文について、鉛筆で原稿用紙に書き写すという作業を行った。

作文の他には、伊那谷十六 市町村すべてから災害報告書や被害等をまとめた資料、被災者名簿などが届いた。

一家が流された被災時の作文だけでなく、別の地に移ってここでごんばっているという作文を集めるため、移住者名簿の提供も市町村に依頼したところ、その名簿も届いた。

また、災害後の復興の様子などを書いていただくために市町村にこういう方を紹介してほしいとお願いしたり、先生に紹介いただいたりしながら作文の依頼を続けた。

集まった文集などは、その段階ではどの作文を載せるか、構成をどのようにするかなどは判断できなかったもので、とりあえず、すべての作文を書き写した。書き写しは大変な作業であり、東京の友達にもお願いしたが、スタート当時から共感し、協力してくれていた伊那谷の中学高校時代の仲間が中心になって手伝ってくれた。書き写した原稿は、なんと原稿用紙三五〇〇枚ほどにもなった。

編集・製本作業

構成内容の検討、編集

本の構成については、実際に集まった作文に目を通しつつ、受験生に限らず、被災された方の体験、支援に対する感謝、これからの目標や夢などを組み込んだ、災害による被災からその後の復興にかけての記録として作成したいと思った。復興の経過などについては、新たに依頼し提供いただいた原稿もある。

このような方針のもと、文集の組み立て・ストーリーを考えつつ作文の編纂を行った。作文を選ぶ際は、災害について、具体的かつ広範囲な内容が伝わるように注意して選択した。

原紙切り

多数の作文に目を通しつつ、その構成の検討を続け、昭和三十九年六月十日ごろになって、原稿の選択や編集が終了した。

その後、考えた構成をもとに、謄写版（ガリ版）にて印刷

『濁流の子』の製作開始

作文の収集

『濁流の子』の製作にあたり、本格的に作文の収集を開始したのは昭和三十八年になってからである。当時、私は東京の大学に通っており、長野を離れていたため、被災地の学校への依頼などの連絡は、ほとんどが郵便を用いていた。当時の封書用切手代金は十円であった。依頼文などは、すべて手書きで何十通も書いた。

たくさんの手紙を書き、作文の提供依頼を行っていたが、それだけではあまり作文は集まらなかった。そのため、直接現地に向いてお願いをすることにした。現地には、電車で行き、あとはバスか歩きで移動した。復旧されているところまでしかバスが通っておらず、それより奥の地域については移動が困難だった。そのため、被害の大きかった地域には出向けておらず、災害の爪痕をあまり目にすることはできなかった。また、復興がどの程度進んでいるのかもわからなかった。

被災地の小中学校九十校に原稿依頼

夏休み

原稿の依頼状を作り五十校に送付

昭和三十八年九月二十五日

被災地の市町村役場、教育委員会を訪問し依頼

大災害を経験した児童生徒の精一杯の叫びを、そして災害の不遇にもめげず強く生きる子らの姿を一人でも多くの人に伝えようと始めたことだが、当初は市町村や学校にお願いしてもなかなか相手にしてもらえず、昭和三十八年夏頃にはまだ反応は芳しくなかった。製作を断念しようかとも思った時期である。

その後、半年間にわたって、粘り強く数度の依頼や訪問を行った結果、熱意が通じたのか、昭和三十八年秋以降になって、徐々に作文が集まり始めた。

集まった作文

昭和三十九年一月までに、約千点の作文が集まった。その多くが学校からお借りできた災害記録文集であり、書き写して返却する必要があった。役所や学校を通じて作文の提供

昭和三十八年五月一日

ページ組に注意しながら印刷を続けた。

印刷作業では、印刷用紙を買って運ぶだけでも一苦勞であった。一束千枚の紙の束だけでも重いので、一束ずつしか持つて帰ることができず、何度も店に通うこととなった。

印刷作業では、インクが濃すぎると裏映りしてしまったり、原紙が切れてしまったりするため、手加減が大事となり、作成した原紙からは、五百枚の印刷が限界であった。

十一月には本編の印刷が終了した。最終的に五〇五部を印刷して、そのうち五部を紐綴じにて仮製本した。

仮製本した文集を長野県知事、上伊那、下伊那の地方事務所と旺文社に送付し、序文を書いていただきたいとの依頼を行った。序文の依頼を行ったことで、新聞でも取り上げられることとなった。

今から思えば、国の事務所として、河川を管理、整備している天竜川上流工事事務所にも依頼できればよかったが、当時はそのような組織があることを知らなかった。

依頼した序文が届いてから、目次と序文の印刷を行い、すべてが整うこととなった。

を行うための原紙の作成に入った。

原紙切りとも呼ばれるこの作業は、「ロウ紙」と呼ばれる原紙を、金属製のヤスリ板の上に載せ、先の尖った棒を木の軸に固定した鉄筆で強く押し付けて書いていく作業である。鉄筆でヤスリ板に押しつけられた原紙のワックスが、ヤスリ目の形に削られてインクが透過する微細な穴ができていく。謄写版による印刷では、この原紙を謄写器に固定して紙を置き、インクをローラーにて圧着させることで、原紙の微細な穴を通ったインクが紙に転写される仕組みである。

ガリ版自体は小学生の頃から書いていて、クラスの文集を作るなど、慣れ親しんでいた。ガリ版の機械は、中学生の頃に親からもらったお小遣いで買った自分専用のものを持っていた。その当時、興味のあった考古学の仲間で研究の発表や新聞発行を行っていた。

今の時代なら、原稿を後からいくらでも直せるが、この頃は間違えたら直せない。修正液もあるがうまく直せない。ガリ版刷りは趣味の一つであったと思う。

六月に、完成のページ繰りを逆算しながら、八十枚の原紙を二週間で書き上げた。この期間、一日の生活がこの仕事を中心に動いている様に思われたほどであった。仕事が進むにつれて腕や指の痛みを覚えたが、休まず作業を続けた。学



「高2時代」
昭和40年2月1日発行
旺文社



ガリ版刷りに使う機材

校にも最低限通っていた状態で、生活の中心が製作活動となっていた。

このころ住んでいた下宿は三畳一間、台所とトイレは共同で、お風呂は近くの銭湯に通っていた。昭和三十年代後半には、そんな学生が多かった。下宿の人との付き合いはほとんどなかった。

製作作業は、この下宿で行っていたが、三畳の部屋で紙をいっぱい広げての作業は大変だった。

印刷・製作・作業

七月になって印刷を始めた。深夜、印刷の音を出して隣室に迷惑をかけてはいけないと思いい、作業は朝と夕に集中して行った。夏場の作業であったこともあり、暑さで原紙のロウは溶け、むっとした室内で連日作業を続けたところ、ついに夏ばてでダウンしてしまった。そのため、夏休みは帰省して養生を取ることとなった。

東京に戻り、十月八日より印刷作業を再開した。

二百ページの作文をB4用紙にB5版二ページ分を刷り、両面印刷して四ページ分で一枚の用紙が出来上がる。それを二つ折りにし五十枚分を組んで、一連の作業となる。裏表の

十二月に入って文集製本の準備を始めた。三畳の部屋では手狭であったため、事情を説明して、下宿の大家さんに協力を依頼した。

大家さんから特別に一部屋借りることができ、そこで印刷した原稿を広げて作業した。作業に共感してくれた大家さんから下宿の大学生にも声をかけていただき、印刷されたB4サイズの紙を二つ折りにし、ページを間違えないように順に整える作業を皆の協力のもと行なった。合計二万八千枚分を折りながら丁合ひする作業を三日間で行うことができた。

製本作業を自分で行うことは難しかったため、製本屋をお願いすることにした。製本屋は電話帳で調べて、問い合わせをした。お願いすることになった中野の製本屋は個人の町工場場で下宿先からは遠かったが、趣旨に賛同してくれたご主人が、わざわざ原稿を取りに来てくれ、注文してから一日で製本して納品してくれた。製本代は片道運賃を含んで九千円（領収書あり）であった。当時は、中華そば一杯が五十九円、大卒公務員の初任給が一万九千円程度の時代であり、大きな出費であった。製本代を含めた製作の費用については、作文を送ってくれた高校生の中で、資金の一部にお金を同封してくれた人もいたほか、一部賛同してくださる方からの寄付もあった。とはいえ、それだけでは足りず、残りのお金は自

分で準備した。ただ、製作に時間を割いていたので、資金を貯めるためのアルバイトをする時間もなかなか取れず、小遣いや食事などを削って資金にあてた。

発行日は、私の二十歳の誕生日(十二月二十三日)となった。



製本作業の領収書

濁流の子を近く刊行

伊那谷出身の大学生の手で

三年前の豪雨禍つづる

三十六年の梅雨前線豪雨の被災地―伊那谷の子どもの体験をつづった文集『濁流の子』が、ちかく伊那谷出身の大学生の手で刊行される。このほど依田下伊那地方事務所長あて、序文を書いてほしいとの依頼の手紙がそと、文集の原稿が送られてわかつた。そのだが、それによる、災害の夜の恐ろしさ、母らぬ友、肉親へのよびかけなど、子どもたちが、聞き、体験したままの当時の様子がおおまかに記されている。

この文集は、上伊那郡駒形町の明治大学二年、雅井栄一君らのグループが計画、子どもたちの体験した災害のよつぎ、伊那谷の

人々とあたたかい支援の手をさしのべてくれた人々に知ってもらいたい―というねらい。伊那谷の小、中、高校生などのつづいた作文六十五編、時十二編がまとめられている。約百、十二月中に行する計画で、資金の五万円は、は郷土家からの寄付をつつ、伊那谷の学校、役場や災害の復旧に協力した関係者に配布したいという。

文集の内容は、当時の記録とともに苦難をのりこえて勇躍に合格した喜び、明るく復旧のよつぎ、なき友へ呼びかけることば、災害で孤児となつた子どもたちの生活など、当時の作文と、現在復興し

た伊那谷をつたえるもの。祖父と兄を一夜にして失つた小学校一年生のことほもあり、涙をこぼす作文ばかり。ふたたびこのような

惨事をつらみかえすな―と結んでいる。依田所長も「読みおわつてから、当時のものが思い出されて別からはなれない。地方自治にたずさわる者に示唆を与えている。伊那谷の歴史にこの記録となるだろう」と、さ、その序文をおくり、文集の発行に協力するといっている。





信濃毎日新聞
昭和39年12月22日(火)掲載記事

濁流の子
西沢知事らも序文
豪雨災害の体験

『濁流の子』の完成

完成した時の気持ち

三六災害から三年半の月日が経ち、文集作成を思い立ってからもずいぶん時間が経ってしまったが、それがやっと完成した喜びはひとしおであった。やった！ やっと完成した！ という達成感と開放感でいっぱいだった。

作文を集めようにも反応がなかった時は、本当に止めてしまおうかと思ったが、既に集まった作文もあったので、途中で止めるわけにはいかない、引くに引けない気持ちであった。大勢の方の協力、市町村も巻き込んで動いていたので自分の事情によって中止するなどできなかった。作文の提供者や協力者にできるだけ早く見せられるよう、出来る限り早く完成させたいという想いだった。

印刷用の字体は正式には習っておらず、自己流で書いたため、今見ると恥ずかしいところはあるが、当時はそんなことを気にする余裕はなかった。ましてや、この『濁流の子』がこれほど三六災害を振り返る節目ごとに注目され、災害伝承の上で活用される文集になるとは思っていなかった。

碓田 栄一 (うすだ えいいち)

- ・1944年長野県中箕輪町(現 箕輪町)生まれ
- ・伊那北高等学校2年在学中に、三六災害を体験し、伊那谷被災地の高校受験生を励ます運動に取り組む。これがきっかけとなって、大学在学中の昭和39年に被災体験やその後の復興の様子などについての作文を編集した『濁流の子～伊那谷災害の記録～』をガリ版印刷で製作した。

三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って

令和2年4月発行

企画・発行：国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7番10号
TEL 0265-81-6411 FAX 0265-81-6419

著者：碓田 栄一

編集：国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
株式会社 環境アセスメントセンター

印刷：株式会社 宮澤印刷

語りつぐ天竜川 第65巻
「三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って」配布のご案内

1. 手渡し配布

新型コロナウイルスへの対応として、手渡しでの配布は控えさせていただきます。
ご了承ください。

2. 郵送による配布

下記連絡先までお問合せいただき、①お名前②ご住所（郵送先）をお伝え下さい。
ゆうメール（規格内・150gまで）で郵送いたします。（180円）

【問合せ先】

天竜川上流河川事務所 砂防調査課

〈砂防調査課〉電話：0265-81-6417（課代表）

3. 注意事項

- ・在庫には限りがございますので、ご了承願います。
- ・手渡し及び郵送に関わらず、お一人様1冊までとし、2冊以上は承っておりません。
ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

「語りつぐ天竜川」 目録

- | | |
|-----------------------------|----------------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山 啓一 著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤 秋司 著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木 徳行 著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條 宏之 著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野 秀章 著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤 武 著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村 真直 著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢 清人 著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢 秀夫 著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山 啓一 著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平 元護 著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 — 伊那郡松島村 — | 市川 脩三 著 |
| 13. 川筋の変遷 — 天竜川と三峰川の場合 — | 唐沢 和雄 著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎 敏孝 著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部 新一 著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原 優美 編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪 寿門 著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野 重美 著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤 武 著 |
| 20. 小渋川水系に生きる — 人と水と土と木と — | 中村 寿人 著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡 忠一 著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤 孝和 著 |
| 23. 土木技術と生物工学 — 生きものを扱う技術 — | 亀山 章 著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本 正治 著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部 新一 著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市村 咸人 著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 — 下伊那郡豊丘村伴野 — | 竹村 浪の人 著 |
| 28. 昭和 36 年伊那谷大水害の気象 | 奥田 穰 著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 — 『熊谷家伝記』を中心に — | 笹本 正治 著 |
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤羽 篤 著 |
| 31. 東天竜 | 三浦 孝美、仁科 英明 共著 |
| 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩沢 仁治 著 |
| 33. 伊那谷は生きている | 松島 信幸 著 |
| 34. 天竜川の災害伝説 | 笹本 正治 著 |

35. 天竜川の災害年表 笹本 正治 編
36. 天竜川水運と樽木 村瀬 典章 著
37. 水辺の環境を守る 桜井 善雄 著
38. 諏訪湖— 氾濫の社会史— 北原 優美 著
39. 河川工作物と魚類の生活 中村 一雄 著
40. 天竜川上流域の過疎問題 山口 通之 著
41. 資料が語る 天竜川大久保番所 松村 義也 著
42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 関岡 裕明 著
43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 藤森 明 著
44. 横川山巡覧記 — 『辰野町資料第 87 号』より —
- 辰野町教育委員会 編、赤羽 篤 校訂
45. 天龍川の鳥たち 福与 佐智子 著
46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造 浮葉 正親 著
47. 田切ものがたり 赤羽 篤 著
48. カエルと暮して 山内 祥子 著
49. 伊那の冬の風物詩 ざざ虫 牧田 豊 著
50. みんなの三峰川を次世代に 三峰川みらい会議事務局 編
51. 三峰川ものがたり三峰川みらい会議 北原 優美 著
52. 天竜川水系の水質 — 「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して —
- 沖野 外輝夫 著
53. 天竜川の帰化植物たち 木下 進 著
54. 中央構造線読み方案内 — 諏訪から大鹿村地蔵峠まで — 河本 和朗 著
55. ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり 赤羽 篤 著
56. 近世信州伊那郡大河原村の自然環境と人間 松原 輝男 著
57. 地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし 松崎 岩夫 著
58. 伊那谷の土砂動態 九津見 生哲 著
59. 天竜川と生きて 下平 長治 著
60. 明日に伝える三六災害 — 川路・龍江の水害体験談と子ども達の取り組み —
- 川路・龍江の方々
61. 天竜川の川の碑 竹入 弘元 著
62. 「東日本大震災」の対応について ～初動対応～復旧・復興に向けて～
- 熊谷 順子 著
63. 三峰川で生まれ育った鉄線蛇籠 北原 富美子 著
64. 天竜川・三峰川河畔でのミヤマシジミ保全 岡村 裕 著
65. 三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って 碓田 栄一 著